

なんかすごいタイトル

指導教員：〇〇 〇〇 発表者：Exxxxx □□ □□

1 章見出し

1.1 節見出し

1.1.1 項見出し

これはある精神病院の患者、——第二十三号がだれにでもしゃべる話である。彼はもう三十を越しているであろう。が、一見したところはいかにも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでもよい。彼はただじっと両膝をかかえ、時々窓の外へ目をやりながら、(鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さえ見えない檜の木が一本、雪曇りの空に枝を張っていた。) 院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしゃべりつづけた。もっとも身ぶりはしなかったわけではない。

- ほげほげ
- ふがふが
- 参考文献の参照 [1]

彼はたとえば「驚いた」と言う時には急に顔をのけぞらせたりした。……

僕はこういう彼の話をかなり正確に写したつもりである。もしまただれか僕の筆記に飽き足りない人があるとすれば、東京市外××村のS精神病院を尋ねてみるがよい。年よりも若い第二十三号はまず丁寧に頭を下げ、蒲団のない椅子を指さすであろう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、静かにこの話を繰り返すであろう。最後に、——僕はこの話を終わった時の彼の顔色を覚えている。彼は最後に身を起こすが早いか、たちまち拳骨をふりまわしながら、だれにでもこう怒鳴りつけるであろう。——「出て行け！ この悪党めが！ 貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、ずうずうしい、うぬぼれきった、残酷な、虫のいい動物なんだろう。出ていけ！ この悪党めが！」

三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負い、あの上高地の温泉宿から穂高山^{*1}へ登ろうとしました。穂高山へ登るのには御承知



図 1: よく見る画像

のとおり梓川^{*2}をさかのぼるほかはありません。僕は前に穂高山はもちろん、槍ヶ岳にも登っていましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登ってゆきました。朝霧の下りた梓川の谷を——しかしその霧はいつまでたっても晴れる景色は見えません。のみならずかえって深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思いました。けれども上高地へ引き返すにしても、とにかく霧の晴れるのを待った上にしなければなりません。といって霧は一刻ごとにずんずん深くなるばかりなのです。

表 1: 年号西暦対応表

年号	西暦
大正元年	1912 年
昭和元年	1926 年
平成元年	1989 年

参考文献

[1] 芥川龍之介. 河童. 改造. 改造社, 1927.

^{*1}北アルプスにある、日本第三位の高峰。

^{*2}<https://ja.wikipedia.org/wiki/梓川>